

日本語臨床のおもしろさ
—私たちのこころを作っている母語—

Terasawa Eriko

寺 沢 英理子



スペイン人の知り合いからもらった陶器の飾り物

表現する手段はさまざまある。ことば、絵、映像、音楽、手芸、おどりなど、人はこれらのいくつかの表現方法を日常的に用いている。それらの表現方法はそれぞれ特徴があって、必要に応じて組み合わせて使われているように思う。ここに優劣はないが、私たち人間は「ことば」を特別な位置に置いていることも確かである。

臨床場においても、クライアントさんたちはいろいろな方法を駆使して表現しようとするが、ことばで語られることが一般的である。もちろん、日本語である。そして、このようなクライアントさんたちの話を聴くなかで、母語の大切さとおもしろさを痛感した。

「言えない」「言わない」「言いたくない」は文字としては少しの違いであるが、意味しているところは大きく異なっている。このようにことばの意味内容を理解するだけならば、特に母語に限定しなくても表現はできると思う。しかし、クライアントさんの語ることばから誘発される聴き手のイメージにまで視野を広げるとき、母語の持つ力がにわかになくなっていく。母語そのものだけではなく、母語を同じくすることとは文化や精神構造を共有していることにもなるから

であろう。たとえば、「言えない」という表現の奥に家族関係などを読み取って理解しようとするとき、家族関係についての共通理解が大変重要になってくる。お母さんとおばあちゃんの関係が微妙なときに、子供が精神的に変調をきたし相談に連れてこられたとしよう。その子供は、お母さんとおばあちゃんの不仲については、初めのころはなかなか言えないであろう。

逆に、精神構造が似通っている部分があると、まったく別の言語であっても同じような用途のことばが存在する。かつて、スペインの友人と話をしていたとき、そこには日本と同じような家族の付き合いや感覚があると思った。そして、スペイン語には日本語の「舅」「姑」にあたる言葉 (suegro, suegura : スエグロ、スエグラ) があることを知ったとき、とても納得がいった。後に、別のスペイン人の知り合いから、一枚のフライパンの形をした陶器の飾り物もらった。そこには次のようなことばが書かれていた。「SUEGURA, ABOGADO Y DOCTOR CUANTO MAS LEJOS MEJOR」これは、「姑と弁護士と医者とは遠くにいればいるほどいい」という意味である。ことばは、文化や精神構造と深く結びついており、それらを表現する際の必要性からも生み出されるのである。ことばが文化や精神構造と不可分であることを表現したものとしては、土居健郎の『『甘え』の構造』に書かれている一文があまりにも有名である。少し長いですが、引用しよう。「それは恐怖症に悩むある混血の女性患者の治療を頼まれた時のことである。ある日彼女の母親から私は患者の生い立ちのことなどいろいろ話を聞いた。この母親は日本生まれの日本語の達者なイギリス婦人であったが、たまたま話が患者の幼年時代のことに及んだ時、それまで彼女は英語で話していたのに急にはっきりとした日本語で、『この子はあまり甘えませんでした』とのべ、すぐにまた英語に切りかえて話を続けた。このことはあまりに見

事に甘えの語の特異性と、同時にその語が表現する現象の普遍的意味をあらわにしていると思われたので、私は話が一段落した彼女に、さっきなぜ『この子はあまり甘えませんでした』ということだけ日本語でいったのか、ときいてみた。すると彼女はしばし考えてから、これは英語ではいえません、と答えたのである。つまり、この2つの話は「舅」「姑」「甘え」という日本語が、時には別の言語とも共通点を持ち、時には別の言語では表現できないということを発見したという話である。いずれも、他の文化や言語と触れたときにこれらの発見がなされている点は興味深い。もちろん、母語がきちんと習得されているという大前提でのことであろう。これらのことは、他の言語への学びや理解を求めるためにも、実は母語が重要なのだという示唆を与えているように思う。

さて、クライアントさんの話されることばを聞きながら、セラピストたちはどのような連想を頭のなかに浮かべているのであろうか。私は「橋渡し機能」についての研究もしているので、ここでは「はし」という言葉を取り上げてみたい。『広辞苑』で「はし」を調べてみると、「梯」「嘴」「階」「端」「箸」「橋」などがある。「梯」と「階」は、いずれも上へと繋がる階段を表している。「嘴」はくちばしのことであるが、餌に繋がる先端という意味では他の意味にも通じるものがある。「端」もまた、「物の末の部分、先端」という意味である。「箸」も、食物に繋がるという意味も含めて「嘴」との類似性がある。「橋」は、二つのものの端と端とを繋げるものである。いずれにしても、端に関与していることから、「終わり」と「始まり」の接点を表しているとも言える。さらに、別れや新しい門出という節目の意味にも発展する可能性がある。また、日本語では夜空に群れ成す星の帯を「天の川」と呼ぶ。英語では、Milky Way である。日本語を母語とする人々は、あの夜空の小さな星の集まった帯状の流れから川を連想し「天の川」と命名した。一方、英語を母語とする人々は、同じ夜空の現象から道を連想したのであろう。このようなイメージの違いを見つけることは結構楽しいと思う。そして、私も日本語を母語としているので、やはり夜空に見られる「あれ」は「天の川」と呼ぶ方がしっくりくる。たゆたうような儂げな感じは、どこか一定ではない川の流れと重なる。ときには、同じ母語を話しながらも大人よりも子供のほうが、現実の縛りから自由にさまざまなイメージを繋げていくのであろう。私が小学校1年生のときのスキー遠足のバスのなかでのことである。バスが豊平川に差し掛かったとき、バスガイドさんが「この川は何という川かわかりますか？」と聞いた。すると、一人の

男の子が自信たっぷりに「天の川！」と声を上げた。バスのなかは大きな笑いで包まれたが、空に見える流れも地上の流れも区別することなく自由に繋げられる子供のイメージ力は神秘的でさえある。なぜなら、古来から、「はし」は、水平方向だけではなく、地上と天上を結ぶ垂直方向のイメージをも含んでいたからである。ここには生も死をも包含するような伸びやかな世界観があり、当然私たちの精神構造にも染み込んでいるのであろう。今も季節の行事となっている七夕、その彦星と織姫の年に一度の橋渡しは、天かける壮大なロマンとして人々のこころを魅了し続けている。この橋渡しが年に一度というところが味噌かもしれない。多くの場合、セラピストたちは理解することとは別の連想の次元で「はし」の多くのイメージを膨らませていることもある。そして、このことがクライアントさんの連想を拓けることに繋がり、クライアントさん自身が抱えている問題についての理解や洞察を深めることに役立つことがある。

もちろん、似たような文化や精神構造を持っている母語を使っただけでも、各地方や各家庭の細かなニュアンスの違いは避けられない。しかし、多くの違いを持ちながらも、母語には大きな共通項が含まれていることも間違いない。ここでもう一つ「腑に落ちない・腑におちる」という表現を取り上げてみる。「腑」とは「胃の腑」などとも用いられ「はらわた」の意味である。また、「心」という意味もある。この表現のように、身体感覚と深く結びついたことばは、一層文化と精神構造によって規定されることになる。あるクライアントさんは、自分の身体化された症状と気持ちが繋がったとき、「自分がなぜこんな症状に苦しんでいるのか本当に腑に落ちたんです」と話された。私たちは、身体感覚を伴う状況を表すことばを用いるとき、ことばの意味を超えた「胃の腑」での受け止めに期待しているのかもしれない。いかに母語を駆使できるか、母語で話される相手をいかに受け止めるかということを考える日々において、確かに母語が楽しくまた愛おしくなっている今日この頃である。また、日本における母語を使った日本語臨床の大切さと楽しさに、日々気づかされている。

小学校でも英語教育が始まる。ついには、日本語は滅びるというようなタイトルの本がたくさん書店に並ぶようになった。インターネットでも英語ができるほうが何かと便利であるとか、国際社会のなかで生き残っていくためには英語教育を国語教育に優先させる必要があるという世の中の流れは本当に正しいのだろうか。私たちの精神構造を表現する言葉を失わないとよいのだが。

学科紹介 人間科学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/ningen/>

学科の特徴

人間科学科は、1977年に「真に人間尊重の立場にたつ総合的な人間科学の探求を教育創造」をめざして、全国で3番目、道内では最初の学科として創設され、現在でも道内唯一の学科です。人間科学という名称には、従来の人文科学を研究・教育する文学部の個別学問の専門性を乗り越えて、学際的な課題にも取り組んでいこうという意欲があります。

この方向をさらに徹底したのが2006年度に改革され、現在のカリキュラムの基本にもなっている4本の柱です。第1に、福祉、心理・教育、社会、文化、思想の5領域の学問分野を設定し、各学問分野の専門性を高めるとともに、学生は5領域の所属にかかわらず自由に科目履修ができるようにし、専門性と学際性の両方の調和を企ったこと。第2は、原則的に全科目を2単位制とし、学生の科目選択の幅を広くするとともに短期積み上げ方式の教育体制をとったこと。第3は、カリキュラム履修の基本に、基幹科目群（必修科目）と基本科目群（選択必修科目）を置き、第4は、1年次の人間科学基礎ゼミナールから4年次の卒業論文ゼミナールまで、4年間一貫のゼミナール体制を整備したことです。

さらに人間科学科では2009年度より、社会福祉受験資格課程の法改正と特別支援教員養成課程の設置に対応して、新カリキュラムを実施しています。

学科の特徴的な講義・授業など

第1は、卒業論文が必修だということです。法則化、体系化しづらい個別のテーマを追求する人間科学では本来、個別研究が重視されます。人間科学科は、その学問的特徴を基本に置いています。第2は、上記と関連して各種の実験・実習科目や調査・演習が充実しています。第3は、多くの資格取得が可能なことです。現代社会への対策としても資格課程の充実を図っています。

(人間科学科長 船津 功)

学科の学生活動

(就職を意識した課外活動体験記)

私は高校の頃に児童養護施設という存在を知り、それと同時に児童福祉に関心を持つようになりました。福祉を学ぶことができる大学は多くありましたが、私はその中で「社会福祉学科」ではなく、札幌学院大学の「人間科学科」という学科を選択しました。福祉をベースとして、その他にも心理や社会などの関心のある分野も学びたいと考えたからです。実際に、在学中は福祉の講義以外にも、女性学や地理学、健康科学など自分の興味関心に合わせて様々な分野の講義を受講



しました。そこから多くの知識を得られたことはもちろんですが、それと同時に様々な人達の様々な考え方に会い、多くの刺激を受け、自分の視野を広げることに繋がりました。また、

講義だけではなく、障がい学生のサポートを行う「バリアフリー委員会」や、地域の子ども達と物作りを行う「SGU遊ベンチャー」などのボランティア活動に参加し、多くの人達と出会えたことも私の大きな財産となりました。講義やゼミ、ボランティア活動などを通して出会った人達は私にとって時には大きな支え、刺激となり、時には意見をぶつかり合わせ、乗り越えるべき壁となってくれました。私が大学で学んだことは、人それぞれが様々な考え、意見を持っており、そのどれかを否定することは出来ないということ。自分の考え方に固執せず、様々な視点を持つということ。それは福祉職を目指していた私にとってとても大切なことでした。

現在私は札幌市内の児童養護施設に勤務しています。子ども達はそれぞれ複雑な家庭の事情を抱えています。私は児童指導員として、目の前の子どもの態度だけで指導をするのではなく、その背景にある不安や葛藤、大人に対する不信感などを汲み取り、子どもがその態度から「何を伝えようとしているのか」を理解するよう心がけています。大学で学んだ「様々な視点を持つ」ことをいつも心に置き、今後も子どもの気持ちに添う大人でありたいと思っています。

(2008年人間科学科卒業・児童養護施設勤務
平 留美)

就職・進学など(大学院合格体験記)

私は2004年4月に人文学部人間科学科に入学してから、少しでも関心がある講義を数多く、また幅広く受講し、横断的な知識を得る努力をしました。他学部履修も積極的に行いました。このように幅広く基礎的な見識を身につけることができる本学科で学ぶことで、「故郷である北海道に元気を与えられる人材になりたい」という自分の強い想いに気がつくことができました。そして卒業後、本学大学院の地域社会マネジメント研究科に進学いたしました。

大学院の研究科には様々なポジション、年齢の方が在籍しており、また講師陣も多様なフィールドで活躍されている方々であり、新たな出会いと刺激にあふれる毎日を送っています。故郷への熱い想いを行動の原動力とされている方との出会いは、自らの視野を広げるきっかけともなりました。

卒業後は、学んだ知識やネットワークを活用して、北海道の地域産業の基盤である中小企業のサポートを行っていく予定です。地域の人と人とのつながりをより強固なものとし、地方の小さなまちでも人々の生活を成り立たせていくことが可能な「まちづくり」。その担い手となっていけるように、今後も学びや実践を重ねていきたいと思っています。

(地域社会マネジメント研究科2年
滝口 由美)

学科紹介 英語英米文学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~eigoiebei/index.html>

学科の特徴

大学のレベルを偏差値以外で測るとしたら、何を基準にしますか？ 設備？ 場所？ それとも就職率？ 目に見える基準もいいでしょう。でも、目に見えない基準というのもあるんですよ。たとえば、自分を成長させてくれる度合、とか。英語英米文学科は単に英語を教えるところではありません。英語を手がかりに様々なものの見方を鍛え、柔軟でありながらも確立した自分というものを作り上げていきます。それを可能にするのは教授陣。他の大学とは一味違います。講義を様々に工夫する教授、講義時以外にも親身になって相談に乗ってくれる教授、いろいろなイベントを企画してくれる教授。どの人も学生の指導に熱心です。しかも研究水準の高い人ばかり。最先端の研究からここでは書けないネタまで、上から下へと話はかけめぐります。成長は一人で努力するには限界があります。しかし、様々な角度から成長を促してくれる誰かがいるならば、思ってもみなかったアプローチでものを考えることも可能になります。教授力、大学選びの基準として導入してみませんか？

(英語英米文学科長 平体 由美)

学科の特徴的な講義・授業など

(Oral Communication D：英語キャンプ)

英語英米文学科の特徴的な授業として、英語キャンプ (Oral Communication D) をあげることができます。平成21年度はニセコ町のペンションで8月24日から3泊4日の日程で開催し、32名の学生が英語漬けの生活を体験しました。キャンプの内容としてはアクティビティを積極的に導入し、例えば英語でのインタビューに英語で答えたり、ひとつの街を設定して講師陣が案内人となり、学生達が旅行者となって案内人に英語で質問しながら自分の課題を解決していくゲームなど、楽しみながら生きた英語を学んでいます。また、ニセコに在住しているオーストラリア人のアドベンチャー会社の社長さんに英語での講演をお願いしたりと、異文化理解を深めるといった内容も含まれています。この授業は教室とは異なる開放された空間で、生活や多様な活動を英語で楽しむという目的を達成することができますので、多くの学生達が参加されることを望みます。

(英語英米文学科 T.P.P. グロース)

学科の学生活動(半期海外留学)

私は2008年の8月から12月までの4ヶ月間、イギリスのエクセター大学に留学しました。エクセター市は割と田舎の方だったのですが、緑豊かで空気が澄んでおり、とても静かな街で、とても勉強に適した環境で



した。向こうの大学では、現地のエクセター大学に通う学生と共に大学の講義を受けるのではなく、私たち日本人と同様に世界各国から来た留学生たちと共に勉強

強しました。現地のイギリス人と一緒に勉強したいと思っていましたが、今では世界中の人々と触れ合うことができた貴重な環境で勉強できたことを誇らしく思っています。

生活面では、大学で初めから決められていた規則のため、最初の1ヶ月は寮生活、残りの3ヶ月はホームステイでした。慣れない土地で自分ひとりでの生活に、初めはとても戸惑いホームシックにもなりましたが、ホームステイが始まると、毎日が本当に楽しくて、本当に帰国するのが嫌でした。

イギリスで学んだことは本当にたくさんあります。勉強面だけではなく、人とのコミュニケーション力や積極性など全てが私の力となりました。留学することができて、本当に本当に良かったです。

(英語英米文学科 2年 江村 美香)

就職・進学など(就職体験談)

この度私は、株式会社ツーリストサービス北海道への就職が内定しました。

昔から旅行が大好きで、旅行関係の仕事に興味がありました。大学ではより専門的に英語を勉強したいと思い、札幌学院大学への進学を決めました。2年生のときにはイギリス・エクセター大学への半期海外留学プログラムに参加しました。多くの留学生や現地の方と様々な経験をし、かけがえのない思い出となりました。この経験が旅行業界で働きたいという気持ちをさらに強くしました。

就職活動も旅行関係を中心に行いました。この業界は人気があり、競争率も高いです。内定がもらえない時期は焦りもありましたが、周りに惑わされず自分のペースで行動することも大切です。就職課の講師の方々も親身になって相談、アドバイスをしてくれます。

就活は自分自身について考える良い機会となりました。在学生、新入学生の皆さんも自分のやりたいことを見つけ、魅力的な企業に出会えるよう頑張ってください。



(英語英米文学科 4年 千田 親弥)

学科紹介 臨床心理学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~rinshoshinri/index.html>

学科の特徴

臨床心理学とは、簡単に定義すると、「様々な場で、人々が「心の健康」を保つため、それを支援する学問である」とされています。臨床心理学やその他の心理学領域の知識をもとにした仕事としては、皆さんがご存知の病院や学校でのカウンセラーがあります。また少し領域は違いますが、企業などの人事管理や職場の環境向上に貢献する仕事もあります。臨床心理学科では、臨床心理学を含む心理学全般を広く学びつつ、上記のような形で社会に役立つ学習の場が用意されています。具体的には「科学としての臨床心理学の基礎を身につける心理臨床の基礎」、「様々な分野の臨床心理学や心理学を学ぶ心理臨床の応用」、「カウンセリングや心理検査の具体的手法を学習する心理臨床の展開」、「臨床心理学だけでなく様々な心理学を学ぶという心理臨床の周辺」という4つの領域について学んでいきます。また、福祉領域に関連するものとして精神保健福祉士の養成課程が開設されています。さらに、臨床心理士認定協会第一種指定校である大学院臨床心理学研究科と連動した教育を行っていることも特徴としてあげられます。第一種指定大学院を修了すると、修了後の実務経験なしで臨床心理士資格認定試験を受験することができます。



学科の特徴的な講義・授業など

臨床心理学科の特色となるいくつかの講義・実習の例を挙げてみましょう。「臨床心理学総論」では、臨床心理学の基礎である、各種心理検査・人間の発達とこころの問題・心理療法について広く学びます。「精神医学」では、精神医学の歴史や現在の状況から精神疾患（こころの病気）の分類や症状、治療法などを学びます。「犯罪心理学」では、犯罪者や犯罪に巻き込まれた犯罪被害者の心理に目を向けます。いじめや不登校などの学校における諸問題に対処するため、学校現場にスクールカウンセラーとして入っていった際の姿勢を学ぶのが、「スクールカウンセリングの理論」です。「心理アセスメント実習」では、知能検査・性格検査・発達検査などについて、具体的な体験を通じ

て学習を深めます。「文献講読」は、様々な論文や文献を深く読み込むことで、さらに高度な知識を身につけ、学びを深めたい人のための科目です。そして、各教員の専門とする領域について少人数で演習を行う、いわゆるゼミナールである「臨床心理学演習」が開講されています。

学科の学生活動

学科に所属する学生は、課外活動では運動系・文科系の様々なサークルに所属するもの、ボランティア活動に参加するもの、またエクステンションセンターで資格試験の対策に取り組むものなど、それぞれが興味のある活動を自由に取り組んでいます。また、勉学の面では、1年次には、全学部の学生が共通して履修する全学共通科目と、いくつかの専門科目を履修しつつ、前期には「基礎ゼミナール」という科目で、クラスの学生同士の交流を深め、4年間の大学生活の基盤となる友人関係を構築します。2年次には臨床心理学の専門的な実習が始まり、この時期には数多くのレポート課題をこなしていくことが求められます。また3年次には専門科目の多くの講義・実習を履修するとともに、自分の選んだ教員のゼミナールで少人数教育を受け、研究発表や体験学習の経験を積んでいきます。そして4年次には就職活動や公務員試験・大学院受験の準備を進めながら、4年間の学びの集大成である卒業論文の執筆を行います。臨床心理学科の学生生活は、全般的に学業にも熱心に取り組んでもらう4年間となります。



就職・進路など

大学の学科で4年間学び、ただちに臨床心理学の知識を活かした専門職につくことは、困難である場合が多いです。そのため臨床心理学をもとにした専門職に就くことを希望した本学科の卒業生は、大学院へ進学し、学びを深め、臨床心理士を目指すケースが多く見受けられます。そのほかに近年は、児童福祉や障がい者福祉などの社会福祉関連などに進む学生もいます。また、一般企業への就職を希望する学生も多く、就職希望者の約半数は卸・小売業やサービス業の職を得ています。さらに、法務技官・刑務官・警察官などの公務員試験に合格し、その道に進む学生も存在します。

(臨床心理学科 佐野 友泰)

学科紹介 **こども発達学科**

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~child/index.html>

学科の特徴

こども発達学科は、人間が生まれ成長する過程で、彼らを取り巻く環境とどのような「やりとり」が成立し、いかに発達していくか、心理学をはじめ、教育学、社会・文化などの視点から学び、子どもの保育や教育実践に寄与しうる人材の育成をめざしています。カリキュラムは子どもの「心理・発達」「社会・福祉・教育」「教職課程」領域で構成されています。多くの学生が小学校、特別支援学校、中学校・英語の教員免許状、保育士資格の取得を目指し、国語、算数、理科など教材研究を進めながら実践的な模擬授業、教員採用試験に向けた教員と学生の自主的な特別講座なども積極的に行なわれています。



学生に行き届く教育を目指し定員50名でスタートした第一期生が四年間の学びを終え、卒業する時期を迎えます。現役合格が厳しいなか、北海道はじめ、神奈川県、千葉県などの教員採用試験に合格、さらに期限付き教員、保育園、社会福祉法人、JR北海道、ANA、北海道警察、農協などの公務員、企業へ就職が決まり、学生は大学の総まとめとしての「卒業研究論文」を提出し、春到来を待ち望んでいます。

(こども発達学科長 小林 好和)

学科の特徴的な講義・授業など

(体験しながら学んでいます)

こども発達学科の学生は、小学校教員の資格のための授業だけでなく、実際に子どもたちと接する体験もしています。札幌市内の小学校で授業をサポートするボランティア、障害者のサポートをするボランティアなどを通じて「現場」で学んでいます。海外研修として、韓国の小学生とのふれいの体験もしています。また、「地域の子ども連携マネジメント実習」という授業では、学生が地域の子どもたちを集めて行事をおこなうという体験もします。行事の企画から、子どもの募集、広報活動、運営など、行事に関わるすべてを自分たち自身で考え経験しながら学んでいきます。昨夏には、「作ろう！遊ぼう！学ぼう！しゃぼん玉で遊ぼう



日光写真を作ろう」という行事を行い、30名以上の子どもたちが参加しました。「ものづくりと子ども発達」では、落葉のポスターづくり、壁新聞、そば打ちなどの体験もしました。皆、体験しながら学んでいます。

(こども発達学科 小出 良幸)

学科の学生活動(保育士試験合格体験記)

私は幼少の頃から小学校教諭になることを目指しているのですが、大学に入学し、保育士試験の存在を知った時、小学生と関わるにしても、乳幼児期からの発達段階を知っておくことは子どもたちを理解する上でとても大切なことではないかと思いつきました。

私は2年越しで合格したのですが、1年目は各教科の内容が今一つわからなかったため、春休みに行われていたエクステンションセンターの保育士講座に参加しました。その後は独学を中心に勉強し6教科合格することができました。2年目は残りの4教科合格を目指して全て独学でやりました。2次試験において、私は「音楽」と「言語」を選択したので、家族や友人の前で何度も練習しました。

限られた時間を上手に使い、取得したい気持ちがあればきっと合格できるはず。この体験記を読んでくれている皆さん、心の底から応援しているので絶対に諦めないで全力尽くしてください!!

(こども発達学科3年生 山科 未来)

就職・進学など

(小学校教員採用試験合格体験記)

私は、こども発達学科の他の学生よりボランティア経験も少なく、大学生活中はどちらかと言うとバイトやスポーツなどの活動に力を入れていました。教員採用試験に向けて一番意識して努力していたことは、多くの人と意見交流をすることでした。先生と個別面接や集団討論の練習を行い、空いている時間はできる限り誰かと教育について討論することに費やしました。意見交流することによって、多くのネタを吸収することができ、自分がどのような学級経営をしていきたいのか、どのように子ども達に対応していけばいいのかを考えさせられました。教師になる自分を客観的に見つめることができました。そして、教師という自分がだんだん完成していきました。教師になるうえで、自分はこうなりたい、こうしたいという夢や情熱を持つことはとても大切です。夢や情熱をより具現化するために、今漠然としている自分の教師像を、今まで現場で働いた先生方と討論することでしっかりとしたものになると思います。1次試験も大切であるが、早い段階から自分を作るために教育について様々な人と話すことをお勧めします。私も、これから教育の現場に立つても様々な人と話すことを大切にしていきたいです。

(こども発達学科4年 山口美沙都)

新任教員自己紹介



教授 横山登志子
(人間科学科)

人文学部人間科学科に着任して慌ただしく前期を終え、はじめての冬を迎えることになりました。前期は以前の職場との違いで戸惑うこともありましたが、ようやく慣れてきて、少し広く見渡せるようになってきました。とはいえ、目の前の仕事や課題に圧倒され気味です。現在、担当している科目は「社会福祉援助技術」の総論や各論、「相談援助の基盤と専門職」、「医療福祉論」、社会福祉士養成科目の実習関連科目などです。

私の専門は、担当科目にあらわれているように社会福祉のなかでも援助技術論(ソーシャルワーク)です。病院や保健所でソーシャルワーカーとして働いていたこともあり、研究上の関心は常にソーシャルワーカーの経験や、ソーシャルワークの現場や実践といったことにあります。「人権や社会正義」といったソーシャルワークの価値を、混沌とした価値葛藤の高い現場でどのように実践しようとしているのかについて探究したいと思っています。

趣味は、旅行、狂言鑑賞、美味しいものを楽しく食べることなどです。狂言の世界は庶民のたくましい知恵やユーモアが「型」のなかですばらしく表現されていて本当に魅せられます。今後ともどうぞよろしく願います。



准教授 二通 諭
(人間科学科)

「特別支援教育総論」など特別支援教育関連の科目を担当しています。昨今、少子化であるにもかかわらず、特別支援学級や通級指導教室、知的障害特別支援学校に通う児童生徒数が実数で増え、障害のある児童生徒、障害があると疑われる児童生徒の割合が高くなっています。したがって、質の高い特別支援教育教員を養成していくことが私に課せられたテーマなのです。私は幼少期から映画が大好きだったこともあり、大人になってからは障害者映画を中心とするコラムを書いてきました。そんなわけで、講義やゼミで映画の話をよくします。実は、映画で特別支援教育の精神や、人間の心を学ぶことができるのです。ちなみに、2009年の私のベストワン作品は、小池徹平主演「ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない」でした。いじめで高校を中退し、10年間のニート・ひきこもり生

活を送った青年が、労働をとおして自分を変えようとするのですから、見ている私も目が潤みます。若い皆さんと感動体験を共有したいと思っています。



講師 眞田 敬介
(英語英米文学科)

2009年4月1日付で英語英米文学科に採用された眞田と申します。本学では一般英語、英語学、英語音声学を担当し、1年生のクラス担任でもあります。

授業では、英語に限らずことばの奥深さや面白さを少しでも伝えられる授業をするのが目標です。私自身、大学入学後に履修した英語学の授業で、「英語を(形式を暗記するだけでなく)意味や機能、人間の認知の観点から見る」ことの面白さに魅せられました。この面白さを、少しでも多くの学生と共有できることを目指しています。

私の知る限り、本学の学生は根が良く(叱る時ももちろんありますが)、味のある人間が集っています。ですから、授業も、授業外での雑談も、とても楽しいひと時です。今後も私自身、学生に負けず(?)悩み苦しみつつも今の仕事を楽しもうと思います。どんな理由であれ、札幌学院大学を入学先に選んだ皆さんと切磋琢磨できることを楽しみにしております。



特別任用
教授 牧野 誠一
(人間科学科)

私の専門は、特別支援教育です。「障がいのある子は特別な場所で教育をする」とするそれまでの制度が平成19年4月から改められました。一人一人が学ぶために最適な場を用意しての教育を行うことになったのです。スタートしたばかりのこの制度は未開発の部分も多く「障がいのある子を支援したい」と仕事に就くことを希望する人は、指導内容・方法等様々な分野について今まで以上に学ばねばなりません。私は、30数年間、養護学校(特別支援学校)や特殊学級(特別支援学級)で知的障がい、肢体不自由、自閉症、言語障がいなどを有する子どもたちと共に学んだり遊んだりしてきました。そのような人たちと共に過ごし・学んでいく中で多くの感動を体験してきました。支援する者も障がいのある人から多くを学び、成長をさせてもらってきました。私は、多くの学生さんが、そのすばらしい世界に飛び込んでいける準備を、伴走しながら支援したいと思っています。

留研報告

身体心理療法・ダンスセラピーの研究 —イギリス・ハートフォードシア大学にて—

ロンドンから北に電車で30分くらいの所にあるハートフォードシア大学のヘレン・ペイン教授の研究室で身体心理療法の理論と実践を勉強しています。(同教授は9月の新学期から所属が変わり心理学科長となりました)。ペイン教授はダンスムーブメント・サイコセラピー協会の中心的人物の一人で、心理療法としてのダンスセラピーの効果を証明して、ダンスセラピーにイギリスの健康保険が適用される基盤をつくってきた方です。統合失調症の専門家のドイツ人教授とによる「ダンスセラピーの効果の証明」、「医学的に説明できない症候群(MUS)」の人たちへの身体心理学的アプローチによる効果の研究などがあります。特に後者のMUSの人たちは病院に行っても治らず病名もつかず病院側も困りさらに治療できないのに出費がかさんでNHS(日本の厚生労働省)も困っているという(数百億円の浪費という計算も…)状況なので、将来、ダ

ンスセラピストによる身体心理療法的な治療

ということが可能になるかもしれません。ダンスセラピスト資格は大学院修士課程で、フルタイムではなく数年間かけても資格取得ができるため、各国から勉強にきています。先日、ケンブリッジの近くにある古城で開かれたオーセンティック・ムーブメントのワークショップ(体験的学習)も、イギリス、ドイツ、ギリシャ、トルコ、エストニア、日本(そのときのペイン先生との写真)と様々でした。英語だけではなく仏語・独語・トルコ語・露語などが飛び交う世界…。日本語だけで何かをしているのでは全くお話にならない文化的学問的断絶を日々、痛感しています。

(<http://toshi-kasai.info/study/>に「身体心理療法イギリス通信」を載せています)

(臨床心理学科 葛西 俊治)



第31回人文学部体育大会を終えて

去年の6月27日、人文学部のみで行われる体育大会が開催されました。毎年行われるこの行事をまさか私が指揮することになるとは思っていませんでした。しかし、今となってはこのような経験ができて大変嬉しく思っております。

約2カ月間、私たち体育委員会はこの日のために準備してきました。初めはもちろん皆入学したてで互いにあまり名前も顔も知らないといった状態でした。そのせいか最初のうちはなかなか予定通りに会議が進まないといった状態が続きました。しかし何度も会議を重ねていくなかで、皆が自分のアイデアを出すようになり、着々と体育大会の成功が見えてきました。しかし困難も数多くあり、とても苦労しました。個人的に今年は去年の体育大会を超えてやろうという気



持ちが大きく、いかに人文学部の生徒を満足させるかという点でかなり苦労しました。正直、去年のプログラムをそのまま今年に引き継いでも良かったのですが、それでは今回の体育委員会が結成された意味がないので、ほぼゼロからプログラムを練り直しました。生徒が競技に夢中になることができ、待ち時間によって生徒が飽きないように、またクラスの仲を深めるための大会になるように、委員会のメンバーが一生懸命アイデアを出し合いました。

本番ではバスケットボール、ドッジボール、バレーボールが全競技男女混合で行われました。途中様々なハプニングがありましたが先輩方の助けを借りながらなんとか終了することができました。また、参加した生徒たちも真剣に競技をしてくれて、この大会を機に仲良くなった友達もいたという話を聞いたので今回の体育大会は大成功だったと思います。

今回協力してくれた審判、事務の方々、先輩方にはとても感謝しています。また、2ヶ月間頑張ってくれた体育委員会のメンバーの皆、本当にお疲れ様でした。

(英語英米文学科1年 鹿又 康明)

編集後記

本号から人文学部報の紙面が一新されました。年2回から年1回に、B5版からA4版に、縦書きから横書きに、活字も大きくしました。巻頭エッセイも2ページとなり読み応えのあるものにしました。それ以外にも、高校生や父兄の方々が読んで楽しめるよう書くように執筆者にはお願いしました。新しい人文学部報が読者に末永く楽しんでいただければと思います。(編集委員長 小出 良幸)